
占夢者人の夢 壱ノ巻

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占夢者人の夢 壱ノ巻

【NZコード】

N4423D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

現代の占夢者である都往朔夜。そしてその居候で、陰陽師の塚原叶。この二人が解決する事件とは？夢と悪霊が絡み合ひしづつと不思議な小説です。

#1 プロローグ

プロローグ

人が見る夢には一通りのモノがある。

それは、自らの希望として現実で見る夢。

そして、もう一つは、睡眠という名の元に潜在的、且つ無意識に見る夢。

それは、言葉を回じくはしているが、必ず意味の有るものであると考えられている。

そしてこの話は、後者の睡眠中に見る夢を追い求める者達に捧げる一つの例に過ぎない。

過去、この世界に夢について語り継がれて来た説話や、記録が多く記録されている。

エジプト、中国、ヨーロッパ、インディオ。そしてその他の国々。

そう、各地で多くの者達の手によって、この夢の研究がなされて来たのだ。

その一説、あの有名なフロイトや、コング博士達も有名な著書をかかげて、己の考える説を上げ連ねている。

そんな中、例外なくこの日本でも、古代、平安と、夢を神の言葉を聞くための手段の一つとして寺社に参詣するなどして、流行して来た。

その例は、過去多数上げられている。

夢占いで得る情報はこの現実の世界に深く関与し、それが人々の心に強く根付いていたのだ。

そこで、貴人に変わって夢を見る夢見法師という呪術者や、はたまた、説話に登場する占夢者という占師が現れたのであった。

また、夢を交換する事が可能であると考えられ、他人に変わつて夢を見、夢を売買するなどと言つ事が行われたと言つ。

これは、この現代でも夢占い師そして、裏家業、占夢者として生涯生きて行く青年と、それを補佐する仲間達の話である。

#1 プロローグ（後書き）

シリーズ長くなりますが、最期までお付き合い頂けると嬉しいと思います。

#2 IJの想いが届くなり・・・

IJの想いが届くなり……

麗らかな春の落ち着いた日射しがこの2DKのアパートの一階の窓超しに差し込んでいる中、一人の青年はもつ必要でも無いであろう、こたつから一向に離れる様子を見せない。

その様子を、乱雑なキッチンの椅子に腰掛けながらもう一人の青年は、テーブルに片肘を付きながら呆れ顔をもたげて眺めている。そんなその青年は時折、左手にはめている時計を気にしながら、「お前よく飽きへんなあ？」

つい堪え切れずに言葉に出してみる。

「何がですか？」

平然と、今取り組んでいる事に終止符を打とうじゃない、こたつの中の青年。

「何がって……一日中そんなノートパソコンに向かってメールの確認やら、はたまた手紙を読んでる事や！」

今一度、テーブル下の膝を組み直して問いかける。

「ええ。飽きませんよ。楽しいですし、それにこれも一つのお仕事ですから」

云いながらも、熱心にパソコンに向かっている青年。名前を都往朔夜（25）といふ。

一見、のんびりとして、人懐っこい容貌に、小奇麗に切りそろえられた短い黒髪の青年。

しかし、その話口調は、のんびりしている。

「そうですか、そりゃもうございましたね。俺はそろそろバイトの時聞や。出かけるから、ほなー！」

云いつづぶつと……

「あー。かえでちやんまだやし、今日はつこへんわ……」

頭をもたげ仕方ないと、キッチンの椅子から重い腰をあげる」の

青年。名前を塚原叶（24）

こたつの住人とは全くキャラクターの違う、女好きをねそつ茶
髪の青年。

どう見積もつても、この一人の共通点なんて見つけられそうも無
いように想える。

「今日は、何時頃戻るんだい？遅くなるようだつたら、困るだろ？
？ちゃんと忘れずに鍵を持って行つておいた方が良い。僕は、一度
眠つたら起きる事は皆無ですからね」

マウスでクリックする動作を止めることもしないで、のんびりと
した口調でそう云い残す朔夜。

「そんなん分かりとるわー過去にあんな痛い目にあおるとるからなー！」

それは、寒い寒い冬の出来事。

夜中のバイトが終わり帰つてみたら、鍵を忘れている事に気付いた。
そこで、中に入いるであろう朔夜に開けてもらおうと呼び鈴を何度も鳴らしその上、携帯で電話を掛けて呼び起しそうとまでもした
が、結局応答無し。

仕方なく行く当ても無い叶は、持ち合わせのお金も無く近くのコンビニで徹夜を決め込んだのである。

もう、一度とあんな酷い思いはしたくは無い。

今でもあの時の事を思い出すと、一発殴らなくては気が済まない
気持ちであった。

「こんなちわ～！」

怒りを表に出そとしたその時、狭い玄関のドアが開く。勝手知
つたる家に入つて来るかのように両脇に小包を抱えた一人の少女。
基い、一見童顔の為かそう見えてしまう一人の女性が上り込んで來
た。

その姿を見るや否や、今までの怒りをすっかり忘れてしまったか
の叶。

そう、その女性の名前は佐藤かえで（28）

「かえでちゃん！」

一田散にかえでに駆け寄る叶は、飛びつこうと云わんばかりである。

しかし、その行動をすでに見切つているかえでは、慣れたかのようにヒラリと上手く交わす。

そして、スタスターと奥の間の、朔夜の元に足を運んでいった。

「朔夜ちゃん、またファンレター届いてたわよ！さすが、今人気絶好調の夢占い師だけの事は有るわね！しかし、数多くの大学の教授から、講演を開いて欲しいとの要望も有るって云うのに…いい加減、こんな所から引越したら？熱狂的なファンが見たら嘆くわよ！？」
六畳の畳の部屋には、ぎつしり積まれた本の山に、手紙の山。はたまた、段ボールの開かれていらない山がこの部屋をいつそう狭く感じさせている。

それはまるで、売れない作家の部屋のようだ。

「その上、こんなお荷物までショットてたら、大変じゃないーー！」

部屋を見渡した後、叶に向かって素っ気無く指をさす。

「かえでちゃんーーーん。そりやないわあ」

かえでの一言に傷ついたとでも云うかのよつに胸に手をやり、よろめく叶。

余りにも大袈裟なリアクションなので、かえでは呆れ顔で顔をしかめた。

そう、叶は現時点、朔夜のアパートの居候。中学校時代に、叶が大阪の実家を飛び出してからこの東京で出会い、且つ今まで何の因果か付かず離れずの暮らしが共にして来た仲なのである。

今でもそのなごりか、叶は、朔夜の元に身を寄せている。

「かえでちゃん？引つ越す気は無いですよ。僕は此処が気に入っているし、それに叶は、お荷物なんかではなく、れっきとした僕の相棒ですよ」

相変わらず、パソコンの画面を見詰めながらシレッといつて退け

る朔夜であった。

「こんらあ～！朔夜！何勝手に俺を相棒なんかにするんだやー…そんな認めとらへんで！俺は！」

聞き捨てなら無いとばかりに、叶は『ツカツカ』と、朔夜のもとに足を運ぶ。

そんな叶の事など気にも止めないで、こたつの上に有る、みかん籠からみかんを取り上げて皮をむきはじめる朔夜。

「まるで、小間使いのようにお前の仕事を手伝わせといで……一体俺のバイトどんだけ変えさせたら気が済むんや！」

こたつのテーブルを一発叩く。何だか締め出しを食らった時のことまで思い出して相乗効果。

その音が狭い部屋に響く。

「でも、ちゃんと、叶には報酬を払つてあげていいでしょ？？？バイト料より弾んではいるはずですが……気に入らないのでしょうか？」

やつと、叶の方を見上げる朔夜。その顔はにこやかな笑みを携えていた。

ムキになつた叶であつたが、この微笑みには勝てるはずも無くてお茶を濁す感じで、顔を背ける。

そんな中、かえでは朔夜の手許に持つてきた小包を解き中の手紙を置く。

その中の一通の手紙の封を切りながら、朔夜は叶の出方を見守つていた。

「…………氣に入らないつちゅう訳や無いんやけど……ただなんちゅうか……」

叶は、言葉を詰まらせ、しきりに自分で思い巡らせている事をそのまま置き換える、正しき言葉を選び出すと懸命になつていた。

何かを思い描くかのように、視線を斜め上に泳がせる。

「…そう、なんちゅうか…」

ただひたすら孝え込んでいる叶。全くりしゃべれない事をしてこる。

そんなことをしている内に、バイトに間に合わせられるか？そんな時を刻む時計の針の音。

そんな時、朔夜は一通目の手紙を取り上げると中に書かれている文字を読み始めた。

しかし『ジシ』と眺めていた手紙の文面から目を離した朔夜は、「これは…」

言葉を漏らした。

「？」

今まで思い巡らせていた叶の頭は朔夜の声に反応し、そしてかえりと共に 視線を朔夜の方へと向ける。

「どうやら、叶。お仕事のようですよ」

『「マリン』』と、満面の笑みを浮かべて、爽やかに微笑む朔夜の様子に、うんざりな叶。

さてさて、今度の仕事は一体何でありますか？

「拝啓 都住朔夜様

初めてペンを取らせて頂きます。

私の名前は八亀佳代と申します。

都住様が裏家業占夢者である事を承知の上、実は折りいった御相談を兼ねこの手紙を書いております。

この一週間ばかり、私の見る夢が全て同じものであるという不可解な現象に悩まされている。という事から語らせていただきます。

これは一体どういう事を意味しているのでしょうか？

何かの暗示？

それとも、警告なのでしょうか？

その理由を解き明かして頂きたいのです。

まず、その夢に出て来る人物の事を語らせていただきます。
去る、一ヶ月ばかり前、私の婚約者、前園克が、結婚式を次の日に控えた矢先、不慮の事故で永眠しました。

彼は純朴で仕事熱心な、明るく優しい青年でした。

そんな彼との結婚は、一年も前からゆっくりと時間をかけて話を進めており、私達の中で、早く一緒に過ごせる日々を夢見ていました。

しかし、彼が亡くなる前夜。私がいつものように電話で彼と話している際、ちょっととした言葉のあやが原因で、喧嘩をしてしまったのです。

今想えば、何であんな事くらいで……と心に痛く響くのですが、そんな自分と、もうこの世にはいない彼との溝は結局埋まらなかつたのです。

そう。私は一言、謝りたかった。

色んな意味を込めて、彼の死がこんなに自分に衝撃をもたらすなんて……

毎夜、夢に出て来る彼。

彼は何も私に語りかけてはくれない。

いえ、何かを語っているのに私には届かないと言った方が適切なのかも知れません。

そんな彼の前で、私は、一言謝りうると努力をしているのですが、私の言葉は一向に彼の耳には届いてはいいかのようにならないで、時は流れて行くのです。

全身全霊をもって、彼に私の気持を伝えようと、もがく事もあります。しかし、想いは届かない……

そんな夢を見るのです。

このような夢を見始めてからと云つもの、私の周りでは色々なトラブルが立て続けに起こり始めています。

御願いです夢占い師、いえ、裏家業として占夢者をされていると噂される、都住様。どうかこの醒めない夢を……彼に謝つて、自然体でいられる夢にして頂きたいのです。

詳しくは、一度お会いしてからで宜しいでしょうか?

もちろん、報酬の方も考え方で頂いております。

連絡先は……』

「朔夜を取り囲んでこの内容の手紙を読み終える叶と、かえで。

「何や。別に俺の出る幕なんか無いやん」

云いながら立ち上がる叶。拍子抜けだとばかりに、一気に肩の力を抜く。

「そんな事は無いですよ。これは明らかに、靈の力が絡んでる。叶？君の陰陽師としての力を借りたい。是非、この僕に力を貸して欲しい」

仕事の話になる時の、一見は穏やかであるがその実、一番熱くなれる朔夜の静かなる微笑が叶に伝わった。

「やけど、夢の事は範疇やないで。俺！分かつとるやろお前も！何処に靈がひそどりつちゅうんや！？靈がこんな夢見させると……とでも言つんか？」

結局、バイトの時間に間に合わないと知り、真直ぐな朔夜の目を戸惑い退けながら開き直ったかの」とく、叶は朔夜の横に腰を下ろした。

「実、单なる夢占いでは、死人が出て来る夢は古来より死と再生を意味するんだ。つまりどちらかに転ぶとこれはとんでもない事になつてしまつと言つ暗示なんです。彼。前園さんが、現れた。つまり、披女、ハ龜さんに対し、新しい道を歩むように示唆していると考える」とも出来る。しかし、問題は、死者と話が出来ないことにあら。このことは、幸運を招く事にはならない

一瞬押し黙るかの様に口蓋を閉じた。

「何がが、前園はんと、ハ龜はんを妨害していいつちゅうんやな？」

その何かを靈やと朔夜は考てる訳か？

叶の中で一つ引っ掛けかる言葉。

『トライブル』

その四文字を思い出したからこそ、今までいた朔夜の無言の言葉を叶は察した。

「」の夢は、婚約者だったハ亀さんに対する危機を告げるものに違
い無い。もし、夢違いとして処理しようものなら、大変な事になっ
てしまつ……」

朔夜は再び瞼を開けた。

「事は急いだ方が良い。叶?その言葉は同意と取つて良いんですね
?」

朔夜の視線に気付き、叶は仕方ないと頬の筋肉を緩めた。

「かえでちゃん、申し訳ないのですが、そこにある、僕の携帯取つ
て頂けますか?」

朔夜が指示すとかえでは、戸棚の上で充電中のワインレッドの
携帯を取ろうと、かえでは立ち上がつた。

「はい」

素直に云われるまま行動を起こしたかえではあつたが、手渡す
時、微妙に手が止まる。

「?」

「朔夜ちゃん? そろそろ次の雑誌の仕事も入つて来てるんだよねえ。
早急に片づけてもらわないと……」

携帯を受け取りながら、朔夜は満面の笑みをこぼし、

「はい、かえでちゃん。分かつておりますよ。有能なマネージャー
さんだからこゝやつて安心して僕もこの仕事に従事する事が出来る
とちゃんと理解つてますから、御安心を」

今までの緊張感のあつた表情とは一変して、ほのぼのとした口調
でかえでに微笑みかける。

そして携帯の蓋を聞くと、手紙にある連絡先に電話を掛け始める

朔夜。

話の結果、一日後、中央線吉祥寺駅のある喫茶店にてP.M.1：
00にて会つ事に決まつたのであつた。

#3 メッセージ

メッセージ

「初めてまして、八亀佳代と申します」
ゆつくりと落ち着いた有線の音楽が流れる喫茶店のあるテーブル
を挟み、朔夜と叶に相対している女性は軽く頭を下げ、自己紹介を
する。

短くカットされた髪の毛は、亡くなった前園克との決別の折なさ
れた行為の果てに有るものだと語られた。

細身で、やつれた感の有る女性。

質音な黒いワンピースが、その姿をより厳かな雰囲気をかもし出
していた。

「こちらこそ初めまして。どうですか？その後……お手紙拝見した
のですが、念のため、詳しくお話願いたいと思います。その前にこ
ちらの自己紹介をさせて頂きますね。僕が都住朔夜で、こちらに座
っているのが、相棒の塚原叶です」

その言葉に合わせて軽く会釈をする叶。

「相棒と申しますと……この場合助手の方……みたいな方なのでしょ
うか？」

朔夜と不釣合いな個性がすぐ横にいるのが意外だなどでも云わん
ばかりの言葉に、

「助手？！まあ、そんなところです」

叶は、テーブルの下で自分の足を踏み付けている朔夜の行為に言
葉を殺して嫌々肯定する羽目にあつ。

「そう云えば御注文は？まだされてないのでしょう？」

テーブルの上に何もない事に気が付き、朔夜は話の前に一息付こ
うと促した。

「あ、いえ……私の方は先にレモンティーを頼んでおりますから

控えめにそう答えるハ雫。

「そうですか、で僕は緑茶を。叶は？」

「俺は、アメリカン」

一先の気持ちの整理をつけるだけの和みの時間を朔夜は設けた。暫くするとオーダー通りウェイトレスがレモンティー、緑茶、アメリカンを運んで来た。

三人揃つて一口口をつける頃、改めて話は始まった。

「ところで、手紙にあつた夢の内容からしますと、亡くなつた、前園克さん……元婚約者が一週間続けて出でくると云う内容でしたね。中し訳ないのですが、もつと詳しく説明して頂けないでしょうか？夢の中の場所や時間、出て来る時の詳しい内容などあればこちらとしても判りやすいものですから」

回りくどい事は抜き。手つ取り早く内容を知りたいと、率直に聞く朔夜。

「はい。それは昼のような夕方のようないえ、夜に近い夕方です。西の空に夕日が沈み、東の空が夜へと移り変わる頃。空が虹色に染まつていく頃です」

初めは自身無さそうに話していたが、ハツと思い出したかのように語りはじめるハ雫。

「場所は判りますか？」

「灯台の見える海岸線の何処かです。海を前に立つています。あ…切り立つた崖の上です。足下を…確かに海を覗き込んだ憶えがあります」

田を瞑り、今夢を見ているかのような感覚で思い出している。

実際、色の有る夢はそつそつ見る事は無い。

夢に色が付いている程、鮮明な事は無いのである。

しかし一週間の間同じ夢を見るとは云々、やはり、ビリとなく思い描くのは難しいとでも云つかのようだ。

「その場所に亡き婚約者の前園さんは現れると言う事ですね。では、

現実でお一人の事をお聞かせ頂けますでしょうか?」

少し、気を効かせるように朔夜は現実の話を持もかけた。

「はい。結婚一ヶ月前は色々大変な時期でした。式についてもめる事が多い中、結婚式前夜、カツとなつた私の方が気持ちの煮えない彼についてつい怒りをぶつけてしまつたんです。今思えば、何故怒つたりしたんだろう?彼に非は無いのに……とさえ思う始末で:彼の死後勝手な私の我慢だったと反省しています」

事数で亡くなつたとの事でやり切れないのであろう。もし、あの時八亀が怒つたりしなければ、また違つた運命を辿り、式を無事あげる事が出来たかも知れないのに…

と考える事も有るのだろう。思いもしない感情の流れが引き起こそ運命は、誰にも分かる事等出来ないのだから……そんないたまれない気持ちが伝わってきた。

「結婚真際には、マリッジブルーにかかるというケースは多々有るようですよ。余り御自分を責めないで下さいね」

「…」

悪い方に考えないようにする為に、朔夜は言葉を選んでいるのが、隣でただ事の成り行きを見て座つていてる叶には判つた。

いつもそうである。

叶はただ、事の成り行きを見守るだけである。しかし、ただならぬ気配がこのテーブルを挟んで感じていた。

そう。実は叶は吐き気が起きそうで、身を固めるようにして、その場で待機をしていたのである。

今はその事を八亀に気付かれてはならないとそう感じ取つてから極自然に見守つてはいるが…

「では、お聞きしますが、海岸のその場所で、八亀さんは何をしているのですか?」

朔夜は再び上手く話を夢の方に持つて行く。

「海を見ていました。でも背後に気配を感じ取り振り向くと、披が立つてゐるんです。何かを云いたげに……でも、何かを私に語つて

いるのですが、私の耳にはその言葉を聞き取る事が出来なくて……最後には、必死に何かを伝える彼と、その言葉が届かない自分。パンツクは暫く続いて行きます

八亀は目をギュッと瞑り、耳を塞ぐかのよつにして手の平で覆つた。

「そうして、気付いた頃、彼は黙り込んで何か考え事をしたかと思うと、私の前から姿を消すんです。空気に溶けてしまつかのよつに……」

パツと目を見開き、朔夜を見る八亀。

この夢がずっと続くのは何か私に伝えたいから?とでも云いなげであった。

もし判るのであれば、教えて欲しいと思っているのかも知れないことは手にとる程容易だ。

しかし、この夢だけで、何かを伝えられるだけの言葉は見つからないのであるう。朔夜は、何かを考えるようにテーブルに肘をつく。「……それで、その夢を見始めてから体調が悪くなったり、周りの人との間に溝が出来始め、トラブルが生じたのですね?」

「はい。日に日に体重が減り、会社では普段しないようなミスはあるわ、友人関係にヒビが入るわ、全く良い事は有りません。体重が減つた事は、彼が亡くなつてから食が進まないからかも知れませんが。実、泣いて全てを忘れる事で何とか保ってきた所も有りますから……」

蒼白な顔色が黒いワンピースの色に反映して余計に顔色が優れなく見える。

「八亀さん?僕の目から見ましても、貴方の体調が優れないのは判ります。睡眠はどのくらいとられてらっしゃいますか?」

「最近はそれでも少なくとも六時間は最低とつてますが……」

ちょっと考えるようにして、答える八亀。

「六時間ですか?その割には、目の下のクマは目立つているようですが……失礼……」

化粧で隠しているのであらうが、隠し切れて無いのが分かつた。それを気づかせようと敢えて云う辺り、朔夜はこの範囲は叶の範疇だと、黙つて隣に座っている叶を見て知らせた。

「…云つて良いのか？」

叶は、朔夜の出番は終わった事知り、一息つく間に、アメリカンを飲み干した。

「…何でしようか？」

突然の交代劇に、八亀は分からないとでも云いたげに、叶の顔を見る。

「叶？お前には判つているんだろう？僕にはその力は無いからね」
朔夜は冷めない内にと、目の前に有る緑茶の入った湯のみを持ち上げると軽く啜つた。

「朔夜？紙とペン持つとるか？」

静かに切り出す叶。そのくらい用意しておけば良いのに、いつもところに依頼心がある叶。

「ええ、持つていますよ」

脇に置いていた鞄から、メモ用紙とボールペンを取り出すと、叶の目の前のテーブルに並べる。

その取り出されたペンを指で軽く摘むよつとして、

「えーとな…こんな感じかなあ？」

まるで、幼稚園児の落書きの方がマシな絵を描きはじめる叶。
そのペントツチを呆れる気も無く見下ろして、
「相変わらず絵の才能ないですな」

笑つている朔夜。

「…放つといってくれ！」

笑いにムカついたのか、ガリガリと書きなぐる叶。かなり子供じみている。

そして、思いのだけを書き込んだ所で、

「八亀はん？こんな感じの人物知らへんか？」
絵を差し出して、叶は問いかける。

しかし、そうは云われてもこんな稚拙な絵で判れと云う方が可笑しかつた。

「…ええと…」

困った顔のハ龜。手を口元に持つていて考え込んでいる。

「困つてらつしゃいますよ。叶？」

今にも吹き出したいとでも云いたげな、朔夜の顔に苛立ちはしたもの、

「そんな事云われてもなあ…絵の才能ないのやナビ…それでも一応、特徴は掴んだるんやけどなあ…」

焦りながら、言葉を見つけ出していた。

「そいや、なんちゅうか、男なんやけど細身で、左目の下にほくろが有つて…」

云われてみれば、そう描きたいと云つ意志が見られる絵ではあった。最終的には言葉に頼る叶。なら初めからそいつじていれば良いものを

いらない恥をかく叶は、何だか微笑ましい。

「細身で、左目の下にほくろ…」

そんな叶の言葉を受け取り、身近なところで思い出そつとしているかのようにハ龜は視線を窓の外に流した。

「年の頃は、二十五、六で、背丈は180位やなあ」

思い当たる所を振り返り、ハ龜は考えていた。そして、

「それはもしかしたら、私の勤めている会社の同じ部署の、二上さんかも知れません」

視線を、叶に定めて、ハッキリと思い当たる皿を伝える。

「そいつとなんやあつたか？」

不躾な質問かも知れないが、叶にはそんな事はどうでも良かつたのかも知れない。单刀直入に訊かないと事実が掴めない。

「…おつき合いを迫られた時期が有りました。……でも、私には婚的者がいるからとお断りしましたが……」

言いづらい事だから…少し心が疼いたのであらう。ハ龜は目線落

とし気味に答える。

「そりなんや。分かつたからその辺でええで。そいつ云う事なら俺も
やりやすいわ」

と、今度は叶が何か思う所が有るかのように考へ込み始めた。

「あの…三上さんが何か？」

ふとした不安が過つたのであろう、ハ龜はボソリと問いかけて来る。

「ん？…云つてええんやつたら云わしてもらうんやけど、ハ龜はん。
あんた、その三上つちゅう奴の生靈に取り憑かれとるんや」

「生靈？！」

聞き慣れない言葉に、たじろぐハ龜。

「でも安心しいや。早めにケリは付けてやるさかい。相手も、まだ未練があるよつて、少し厄介やけど、今は俺の方方が上や…やけどこのまま放置しどつたら厄介かも知れんなあ……」

ちよつと、考えるようにして、チラリと朔夜の方に視線を送る。

その様子に気付き、朔夜は肯定のサインを送る。

「どや？明日うちの方に出向かれへんか？こついう事は、さつさと片を付けた方がええよつて。朔夜の方も許可くれたし、まずはこちらの方が重要やしな」

その言葉に、

「叶がそういうのなら、早めに取りかかりましょう。どうです？明日なのですが、僕の家に来て頂けますでしょつか？出来れば、叶の仕事の後、僕の仕事の方も片付けられると思ひますから」

ハ龜には一人の云いたい事が良く理解できなかつた。

そして、このままではいけない事は重々承知している。その上不安な気持ちが過らないと云えば嘘になる。

だけど、自分はこの人達を信じて今の状況を開けるすべしか思ひ付かない。

だから、

「明日ですか。仕事、六時には終わると思いますが、その後でも宜

しいでしょつか？」

と切り出した。

「結構ですよ。夢を見るには、夜の方が好都合でしょうかね？」
一囗りと穏やかな笑みを見せる朔夜は、ハ亀の心を落ち着かせるだけの魅力があった。

「やつたら朔夜、住所の分かるもん出さなあかんやろー。」

云われなくともと、自然に名刺を渡す朔夜。

その様子に、何や気付いとるんか…と、両手く無さ氣の叶。
その二人のコンビネーションの悪さに、戸惑いはあつたものの、
ハ亀は、不思議と少し気が安らいでいた。

「こちらの住所までお越し頂けますでしょか？詳しく述べて、この名
刺の裏に書かれてある地図を見ていただければ幸いです」

名刺の裏に地図が書かれてあるなんて珍しいとは思つたが、確かに解かりにくい場所である。下北沢の、入り組んだ住宅地。

「では、明日、お伺い致します。あの…報酬の方は？」

ちょっと躊躇いがちに、ハ亀は切り出した。

「その話は終わってからで良いですよ」

「そうそう、取りあえず、全てを終わらせん事には話でへんやろ
？今はそんな事考えとらんで、俺らに任せときいな。悪いようには
せえへんから」

こうして、話の段取りを付け、三人は喫茶店を出た。

「それでは、明日お邪魔致します。何ぞ宜しくお願ひ致します」
深々と頭を下げ、ハ亀は吉祥寺駅北口のバス乗り場へと足を伸ばして行つた。

その後ろ姿を晃送るようにして、朔夜と、叶は立つていたが、叶は忘れないようにと、ポケットから取り出した一枚の紙切れに何やら呪文をかけると、パツと室内に放り投げた。それは、一羽の鳩となりハ亀を追うかの様にして大空へと飛び立つて行つた。

「何ですか？式神ですか？」

「そりや。何が有った時のためには守護するもんがいるやうつ?俺の忠実な部下にその任務を与えてやつたんや」

それだけ云うと、ズボンのポケットに手を突っ込み、飛び立つた鳩を眺めている。

「全では明日片を付けたるわ…朔夜も、準備怠るなや!」

「云われなくとも分かっていますよ。僕の方は、あの夢の内容が手にとるように理解できましたからね」

にこやかな笑みで答える辺り、何を考えているのか判らないといつも思うのであるが、これが朔夜のスタンスなので何も言う事は出来ない。

しかし少しふくらい怒った朔夜も見てみたい気がするなと思つ今日この頃の叶。

そんな時分、路地を行き交う人々の雑踏の中を、一人はこの場所を後にした。

#4 真夜中の異変

真夜中の異変

「それじゃあ、明日のために徹夜する事になりますから、電気点けてますけど、眠れそうになかったら、云つて下さい」

朔夜はそう云い残すと、部屋のドアを閉める。

朔夜は、仕事の前の日に必ず睡眠を削除する。それは、次の日のための儀式のようなものもあることは叶も了解の上であった。こうしないと、朔夜は夢の中に入つて、仕事が出来ないからだ。

「ああ、よう判つとるさかい、気にすんなや。俺はいつでも何処でも寝れる体质やからな」

気にする必要はない。叶は慣れっこだとでも云うかのように、ヒラヒラと手を振つて気軽に流した。それが叶流の答えである。

しかし、先程から気になる事があった。

何故か虫が知らせて来るのかも知れないが、右の掌が熱くなつて来ている。これは、何かの予感かも知れない？

何か起こる前の兆候が今この体に起こつているのを感じながら、自らの部屋に入りベッドに横になつた。

そんな中眠れる気がしない。

それが今の叶の心境であつた。

人は何故夢を見るのであるう？

それは予知夢の類いなのか？

自らの意思の中に組み込まれる知られざる未知数。

そして、無関心に放つておく事の出来ない重要な知らせ。

でも、叶は夢を見る事は無い。

だから、その感覚は解からない。

たつた一つ、自分に欠けているモノ。

それが夢だつた。

「一」

突然目の前に、流れる映像。それは叶がベッドに横になつてから二時間経つた頃の事である。

真っ白い紙が一分割されるかのように引き裂かれた映像が目蓋の裏に焼き付いた。

これが自ら放つた式神に何かが起こつた事の暗示である事を悟り、叶は休めていた体を一気に緊張させる。

そして、飛び起ると同時に朔夜の部屋に駆け込んだのである。

「朔夜！今直ぐ向かうで！ハ龜はんの身に何か起こつたわ！俺の式神がやられた！」

大きな音を立て、飛び込んだ先に支度を済ませている朔夜の姿を見つけ、

「なんやお前？何しとるんや？」

「分かつてますよ……不可思議な印象が頭を過ぎつたので……しかし、このまま行つて仕事ができるかどうか……」

光の加減か？青やめた朔夜の顔。

「調子悪いんか？……もしかして……」

普段だつたらここの一発、喝を入れるくらいの勢いで、叶は接する事ができるのであるが、この事態の流れで行くとそういう訳にも行かない。

朔夜にとつて一日の猶予がなければこなす事が出来ない事も有り得る事態でもあつたから……

「取り敢えず、タケシー呼ぶさかい、少し休んでろ。つたくこんな

時に…」

「ぶつぶつ言っているだけましかも知れない？まだ自らの精神に余裕があるのでだから。

しかし今になつて、あの生き靈の力がレベルアップする等とは想つてもいなかつた。計算外の出来事。

「シマツタ！悔つていた！」

と後悔する中、取るべき行動だけは確實にこなして行く。
こたつの上に置かれている、朔夜宛に送られて来た手紙を手に取ると、裏面に記載されてある住所だけが頼りであつた。

それをポケットに忍ばせると、一日散で自らの携帯から近くのタクシー会社を手配する。

五分後、タクシーは一人を乗せ、吉祥寺へと向かつた。
それは夜中の零時過ぎの事であつた。

一時間弱の夜間の徘徊。

タクシーの中で、何とか体調を取り戻したのであろうか、叶は朔夜の顔に血の気が戻つて来ているのを察して一息つく。

「何とか意識の方ははつきりしてきましたよ。迷惑を掛けたみたいで申し訳ないです」

珍しく躊躇いがちに話しつける朔夜。明日は雪でも降るのか？
「別に迷惑なんぞ掛けられとらんわ。それより、ハ龜はんの方が気掛かりや…俺とした事が、してやられたやなんて…この借りは倍返しやな。朔夜、体調整えとけや。ええな」「ええな

真直ぐ前を見てそれだけ云うと、押し黙る叶。

屈辱とでも云つかのよづな後悔の念が、珍しくも叶の中では渦を巻いている事が、手に取るように分かり、朔夜はそのまま気持ちを察し、何も語らなかつた。

そして、いつもと条件の違つこの状況下を、どう打開するかに焦点を向ける。

睡眠の削除。

これをしないで、占夢をすると一体どうなるのであらうか？一向に予測が付かない。

経験の無い事をする上の覚悟をしておかなければならぬ事は、この時点でハツキリと判つた。後は、自らの力を出し切るしか法はない。

無常にも時は過ぎて行く。

不安を拭う間もなく、一人を乗せた一台のタクシーは、夜間運賃のメーターを気にする事無く、無言のまま運んで行った。

そして目的地、八亀の自宅に何事も無く辿り着いた。

表札と、ルームナンバーを確認し、ドアの前に立つ叶と朔夜。八亀は一人暮らしのアパート住まいであった。

それを良かつたと、叶は感じていた。

もし、家族と住んでいたら、こんな時間に何の用だと怒鳴られる事を覚悟しなければならないと感じていたから。

じつして一つの問題は解決したのである。

しかし一番の問題は、この部屋にどうやつて入るかであった。
現状、部屋に電気が点いてない。それは八亀自身、もう眠りについてしまった事の証である。

しかしこの状況下、いつまでもドアの前に一人で突っ立つてゐる訳にも行かない。そうなると不法侵入する他無いではないか？

分かっているものの、夜中に年頃の女性のお宅に不法侵入する事が躊躇われる……が、そもそも云つてられなかつた。

「わちやー！ 何なんやこの靈氣は…………こんなに根に持つ生靈は初めてやー根性メチャメチャ悪いやん！」

苛立つていた叶は、ハツ当たりのように癪癩を起こす。

ドアの奥から感じられるドロドロとした妖気。さしもの叶はその根性に圧倒されていた。

「くそつーこれやつたら俺の式神破つたのも頷けるわ！」

気分悪いとでも云つかのように、吐き捨てる言葉。

「叶？ハ亀さんの方はどうなんですか？」

朔夜はスルリと叶の横に立ち、静かに事の次第を訊いて来る。

「まだ、取り込まれてはないわ。それより、このドア開けん事には話にならん。どうするんや、朔夜！」

「管理人呼んで来るつたつて、この時間やし。見ず知らずの訳の分からん男一人が、いきなり乗り込むも問題やし…手が思い付かん！」

そんな焦つている叶を尻目に、何も言わず朔夜は、アパートの裏へと足を向け始めた。

「おい！何するつもりやねん…て…」

「非常事態でしきう？事が起きてからは仕方有りませんからね」

冷静な表情で微笑むのを見て、密かに敵に廻したくないと想う叶。

裏に回ると、鉄骨の少し錯が付いた階段がある。

その階段を使って、二階の窓に朔夜は一筋のメスを入れた。

「こんなもん何処から持つてきたんや！」

どう考へても、泥棒が使う手口であると思われる、道具。しかも旧式。スツと円形に線をひいている。

「何かのために、コレクションしてたんですよ」

あつさりと云つて退ける辺り、犯罪者の匂いが漂つて来そうだとも想われたが、叶はあえて口には出さなかつた。

暫くするパカッと開いたガラスから朔夜は手を潜ませると、内側の鍵を閉ける。そしてガラス戸を周りに悟られないように、音をたてないように、

引くと静かに侵入する事が出来た。

中は真っ暗で何も見えない状態であったが、奥の方で呻き声が聴こえて来るのに気付き、二人は足早にその方へと向かう。

廊下を出た右に位置する部屋。

そこから、苦しそうな声が聞こえて来る。

ガラリと開けたその部屋に、無数に飛び交う禍々しい青白い光の渦。

「なんてこつた！」

叶は、脳の中を素手で驚掴みにされる気分でその靈魂を見上げた。部屋に、生き靈の姿がクッキリと浮かび上がり、眠っているハ龜の身体を押さえ付けるように浮かばせていた。

そして何処からとも無く引き連れて来たのであらう、低級靈までもが浮遊していた。

「どういった状況なんですか？」

こんな状況で靈感のない朔夜に冷静になつてもうつても困ると察して、

「悠長に云つてられるもんやないんや！今直ぐ取りかかる！」

禊もまともに出来てないが、これ以上の猶予はなく、ハ龜の精神に異常が出る前に靈を払わなければならない。

一気に印を結びはじめる叶。部屋の構造も何も把握できないが、方角だけを頼りに事を進めた。

「靈界の分子よ、我の元に集え！我ここに有らん！」

叶は言靈の力を借りて、辺りの迷える靈魂を引き寄せる。すると

ハ龜に引き寄せられていた靈達は一気に叶の方へと流れ始めた。

眩しい光が叶の周りに纏わりついて来る。

「今や！朔夜！こいつらの事は俺に任せとけ！少しでも足止めしとするさけ、お前はハ龜はんの夢の方を何とかしいや！」

朔夜にはこの状況の事は一切目に見えてはいなかつた。

しかし、自分のすべき事は見えている。

「後は任せましたよ！」

すると、大きくすうっと息を吸い込み吐き出すと、心を解放するかのように、氣を抜く。

いつもと同じ仕事の感覺が蘇り、緊張も半ば、立ちのいて行く意

識。

この調子なら、上手くいく！

崩れ落ちる朔夜の身体。そして、次第に意識は体を離れ現実から遠退いて行くのであった。

#5 真っ白な風景

真っ白な風景

ざざ波の音が聴こえて来る。

朔夜は意識を開放し、体から抜け出るかのようにして、八亀の夢の世界に入り込んだ。

いつもなら、徹夜しての行為なので何だか慣れない感覚ではあつたが、真っ白な風景の一角に入り込む事が出来た。

目をこらしてみると、細長いコンクリートで出来た建物が田に飛び込んで来た。

それが灯台である事は慣れて来た目をこらした時ハッキリと田に焼き付いたのである。

暫くすると、この風景が濃く鮮明に浮かび上がってきた。そして、色が滲み出して來たのである。

空は七色に変化する夕刻。

確かにこれが八亀の夢の中である事は、ハッキリと自覚できた。

『失敗はしていないようですね』

無意識界で意識を保ちつつ、八亀の登場を待つ。

まだ八亀はこの場所にはいないようである。

靈の妨害を受けているためか、混沌としたこの無意識界に入り切れてないのかも知れない。

無意識界での動きが取れ始めて、朔夜の意識は順調に制御でき始めた。

後はこの場所に現れる、八亀を持つばかりであった。

そんな時、透明な室気の中から、一人の女性が浮かび上がつて来るのである。

それが判り始めた頃、夕日が水平線に消えようとしていた。

『叶、やりましたね。取り敢えず、生靈の方は片が付いたと言う所

でしょ「う」

一息つく朔夜。

そんな時、西の空に思いを馳せていたハ龜の体の背後に、もう一つの影が浮かび上がった。

朔夜は遠目で見ている訳にも行かず、ハ龜が隣に来るまで近づいてみる。

二人に気付かれないように…

すぐ後ろの気配に気付き振り返るハ龜。しかし、もう一人の人影の言葉は届いていないらしい。

『このままではいけませんね』

そう、届かない前園の言葉。

このままでは、始まりも終わりもないエンドレスな悪夢。

『神聖覧強、夢売買致します。まずは…』

大きな意識を室気に溶け込ます感じで朔夜は辺りをなぎ払った。一新して、崖の有るこの場所から周りが昼間の草原に変わった。青々と息づく草は、地平線の彼方まで続くかとも思える雄大な大地に根付く。

その中に前園とハ龜は立っていた。

『そして…』

この夢の世界を覆うような朔夜の意識体は黄金色の息を吹き掛けるように風を起こす。

暫くすると音が周りに広がつて行く。

風に擦れる草の音が心地よい。

そして…

「克…さん」

言葉がクッキリと辺りに広がつて行く。

「どうすれば許してくれるの？私はただあなたに謝まりたいだけなのに…」

泣きながらハ龜は問いかける。

「どうしたんだい？君らしくないじゃないか？佳代。俺は、君のい

つもの笑顔が見たいな

「！」

今まで一度たりとも聴こえてこなかつた前園の言葉が聴き取れる。

『これで一安心ですね。それでは僕はお邪魔ですから……』

そんな事を朔夜は孝えていた。

しかし、普段ならここで、夢から離脱出来るのであるが、どうやらそういう訳には行かなさそうである。意識を解載から収縮するのに、無理がある事に気が付いたから…

このまま、八亀の夢が終わるまでこの場所を離れる事が出来なくなつたのである。

「克さん…でも私、これからどうすれば良いの？貴方がいない世界に独り取り残されてしまつた私には、この先生きる勇気もない…」前園を前に弱氣の八亀。

それは、云いたい事の一つも云えないでいるようだつた。

「僕はね、君の幸せを願つてているんだよ。さあ、勇気を出して、笑つてじらん。そうすれば、僕は安心して眠る事ができるのだから」前園は、静かに両腕を差し伸べる。そして、八亀の肩を優しく抱き寄せた。

「僕はね、後悔しないとは云い切れない。佳代をはじめ残して來たものがたくさん有るのだから。返つて許して欲しいと想う事ばかりだ」

優しい言葉。

「本当はね。克さんに謝りたかった。私、我が儘だったの。『ごめんなさい…』こうして貴方とお話ができるのを楽しみにしていたの。一言、『じめんなさい』と謝りたかった。これは私なりのけじめ。これからは、どんな時にももつと人を想い遣る事ができるような女にかるわ。だから、私の事を見守つていてね。約束よ！」

二人の重なつたシルエットが一面の草原の中で一つのアクセントとしてスウッと消えて行つた。

その様子を見て、朔夜は揺れる画面を見ていたかのように一瞬考

えを素に戻したが、消え行く残像を持つて、意識はこの場所を離れて行つた。

『良かつたですね。ハ亀さん』

そうして、朔夜の意識は現実の世界に舞い戻つて行つたのである。

#6 ゼロからのスタート

ゼロからのスタート

朔夜の意識が身体に戻ってきたのは、もう夜が明けるであろう頃であった。

夢の中の時間の流れは不規則だ。しかも、無意識界の時間と、意識界の時間が混ざると、その時間は膨大になる。

そんな中まだ覚醒し切れぬ身体を立ち上げハツと息を飲んだ。

「お疲れ様でした。どうもありがとうございました」

にこやかなハ亀の顔が倒れ込んでいた朔夜の目の前にあつたからである。

「占夢は効いたようですね。もつ、夢に苦しむ事はなくなるでしょう」

朔夜の身体を支え起こすように、叶は側に控えている。その叶に、

「叶？生靈の方は無事片が付いたようですね？」

「当たり前やん。俺を誰やと想つとる？こんな事朝飯前やつて」

一度は、焦っていたのにこの始末。

記憶に無いのかこの男は？とも想えるほど、叶にイキイキしていた。

しかしここで、お腹を鳴らす叶。その様子にクククと朔夜は笑っている。

「あの…お礼に、お食事して行きませんか？大したものは出来ませんが、心ばかりのお礼ですから」

ハ亀は二人の顔を見渡し微笑みながら申し出る。

「良いんでつか？ならお言葉に甘えまして…」

叶の言葉に一人は一瞬呆れ顔になつたが、爆笑する。

「何や？何が可笑しいねん！」

膨れつ面の顔にあどけない性格がにじみ出でている。それが可笑し

かつたのだ。

「叶、君は本当に面白いですね」

朔夜は支えられている身体を起こしながら答える。
もう大丈夫だとでも言つかのよつて……

「報酬は、どうしましょつ？一応用意させて頂いたのですが……この
くらいで宜しいでしょうか？」

軽い食事の後、帰る真際、玄関の所で封筒を渡すハ龜。しかし、
その封筒の中を見て、

「この分とこの分はお返し致します」

朔夜は封筒の中身を一部引き抜いた。

「不法侵入の際、ガラスを破損させてしまいました。そして、十分
な施しが出来なかつたのでこちらもお返し致します」

そして、封筒の中は初めの半分に変化する。

「タクシー代と、生き靈払いの分だけ頂きます」

「でも……」

渋つてゐるハ龜に、

「朔夜がそう云つとるんや。何も気にする事無いわ。受け取つとき
い」

叶は朝飯を食えたと、さも満足氣に後押しする。

「では、これで失礼します。また何か起つたらお気軽にして連絡下
さい」

そうして一人はハ龜宅を後にしたのである。

「ほんま、がめつないな……商売やう？」

帰りの井の頭線の電車の中で本音を持ちかける叶。

「商売ではありませんよ。仕事とは名ばかり。飽くまでボランティ
ア活動ですか。報酬は、叶のために貰つているんですから、もう
良いでしょう？」

いつもやつである。

報酬は自分のものをもらわない主義を一貫としている姿は凄いが、叶的には面白くなかった。

慈善事業でこの仕事が成り立つはず等ない。いつも口を酸っぱくして云っている叶はあるが、跳ね返つてこない言葉のやり取りだからこれ以上云つても無駄だと理解する。

「それに、私の本職は夢占い師のですからね？」

雑誌連載の方を本業としている事を改めて云つ辺り、叶は頭が上がらない。

確かに地に足が着いてないような仕事ではあるが、叶よりはマシである。

いつまでもバイトして社事に従事できない自分。「定職に付かないでいる辺り問題だとはつきり感じ始めていた。

「陰陽師の仕事なら、心強いんだけどなあ」

しかし、それだけでは食つていけない。

その事を分かつているから、未だにバイトをしていく。

でも、いい年だし、もうそろそろ身を固めるのも正しい選択なのかも知れないと少しづつ見解を広めていた。

「なあ、朔夜？お前はこのままこんな調子で生きて行くんか？」
未だ分からぬ先の未来。

不安はある。

叶はそれを考えていた。気儘な生活は気分が良い。

しかし、生活力のない今、どうすれば良いか考えてる。

「なあ、いつそこの仕事を本業にせえへんか？会社として成り立たせるんや。どいや？」

恐る恐る訊きたかった事を口に出してみると、

「会社にするつもりはありませんよ。それだけリスクは増えてしまいまからね。それに、僕にその器量はありませんから」

一方的に撥ね付けられる。訊くだけ野暮であった。

「叶は、何をそんなに急いでるんですか？急ぐ必要性はありません

よ。この僕の目の届く所に居てくれたらそれで良いんですから

またこれだ。陰陽師として利用できる所だけ使う。

それが、計算高いって云うんだと心で思つてはいるのだが、口には

決して出せない。

ずっと居候をさせて頂いているのだからと、内心複雑なのであつた。

「分かったわ。それなら、またバイトするわ……」

心に刻む。

結局因縁から離れられるものではないのだと判つてはいるのだから。

「帰つたら、かえでちゃんとお仕事依頼が待つてます。叶も、早く新しいバイト探してくださいね」

人事のように軽く云われると人の気も知らんとと、悪態つきながら、これ以上云つても無意味だと自覚している。

「次はどんなバイトにしよう……」

情けなくもボソリと口に出す。

また今日一日が始まっていた。

気持ちの良い春の日射しが差し込む早朝。こうして一人は各駅停車の電車に揺られながら、下北沢の駅へと眠りそうになる意識を保ちながら向かっていたのであった。

#6 ポロからスタート（後書き）

この続きは、番外編となります。
またのお付き合い宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4423d/>

占夢者人の夢 壱ノ巻

2010年10月8日15時58分発行